

信行要文 ①

第十回 法華講夏期講習会 第一期

皆さん、おはようございます。

平成二十五年度の法華講夏期講習会第一期に当たりまして、恒例により「信行要文」についてお話しいたしたいと思えます。

これについては先年からずっと続けておりますが、^{しんちよく}進捗状況が思わしくなく、なかなか進みませんが、御聴聞のほど、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、テキストを開いてください。最初は『四信五品抄』です。

1 四信五品抄

問ふ、^{なんじ}汝が弟子一分の^げ解無くして^{ただ}但一口に南無妙法蓮華經と称する^そ其の^{いかん}位如何。答ふ、^こ此の人は但^{なら}四味三教の^{ちようか}極位並びに^{あら}爾前の^{はたまた}円人に^{しょうしゅつ}超過するのみに非ず、^い将又^{ごん}真言等の^{おん}諸宗の^{ぞう}元祖、^{せん}畏・^ま嚴・^{どう}恩・^{しょうしゅつ}蔵・宣・^{しょうしゅつ}摩・導等に^{しょうしゅつ}勝出すること百千万億倍なり。（御書一一一五〇一行目）

この『四信五品抄』は、建治三（一二七七）年四月、日蓮大聖人様が五十六歳の時に身延で認められ、^{したた}下総^{しもうさのくに}国の富木常忍に与えられた御書であります。

この『四信五品抄』は、大聖人様の「十大部」の一つに数えられる重要な御書であります。

ちなみに、十大部というのは年代順に、まず『唱法華題目抄』で、これは文応元（一二六〇）年五月にお認めであります。

二番目が『立正安国論』です。これも文応元年の七月にお認めであります。

三番目が『開目抄』で、これは文永九（一二七二）年二月、佐渡においてお認めであります。

四番目が『観心本尊抄』で、これは『開目抄』の翌年、文永十年の四月に、同じく佐渡においてお認めになっております。

五番目が『法華取要抄』で、これは文永十一年五月にお認めであります。

六番目が『撰時抄』で、これは建治元（一二七五）年六月に、身延においてお認めであります。

七番目が『報恩抄』で、建治二年七月の御書であります。

そして、八番目が当『四信五品抄』でありまして、先程も申しましたように建治三年四

月のお認めであります。

九番目が『下山御消息』で、これも建治三年の六月にお認めであります。

最後の十番目が『本尊問答抄』で、これは弘安元（一二七八）年九月のお認めであります。

これらが十大部であります、そのなかでもさらに重要な御書が五つありまして、『立正安国論』『開目抄』『観心本尊抄』『撰時抄』『報恩抄』を「五大部」と申しております。

これら五大部、十大部については、皆さんがお持ちの『平成新編御書』の目次に、判りやすいように印を付けてあります。つまり、五大部には二重丸(◎)を、十大部には丸(○)を付けてありますので、お帰りになりましたら、それを御覧いただきたいと思ひます。

さて、この『四信五品抄』は、末法の法華經の行者の修行の姿を述べられている御書であります。

まず、法華經の分別功德品第十七に説く四信五品について述べられ、一念信解・初随喜が末法の法華經の行者の位であり、その修行は五波羅蜜を制止して、つまり布施波羅蜜・持戒波羅蜜・忍辱波羅蜜・^{にんにく}精進波羅蜜・禅定波羅蜜・智慧波羅蜜の六波羅蜜のうち、最後の智慧波羅蜜を除いた五つの修行を制止して、一向に南無妙法蓮華經と唱えることが末法の修行であり、これが成仏の^{じきどう}直道となることを明かされているのであります。

また、初心の行者が一分の^げ解もなく、ただ題目を唱えるだけの功德についてもお示しになっておりまして、その仏法上の位についても詳しく述べられているのであります。

さて、この「四信五品」とは何かといいますと、法華經の功德について、在世の弟子に約して四信、滅後の弟子に約して五品があることを、法華經の分別功德品第十七の文に基づいて、天台大師が『法華文句』に述べられているのです。

このうちの「四信」というのは信心の段階を四種に分けたもので、初めは一念信解、二番目が^{りやくげごんしゆ}略解言趣、三番目が^{じんしんかんじょう}広為他説、四番目が深信観成であります。

初めの一念信解というのは、一念の信心を起こすことで、次の略解言趣とは、説かれたことの趣旨が^{りょうげ}ほぼ領解されることを言ひます。それから三番目の広為他説は、説かれたことを信受して広く他人のために説くことで、四番目の深信観成は、深い信心に達し、真理を観じて理解できることであります。これが、信心の段階を四種に分けた四信であります。

次に「五品」とは修行の方法を五種に分別したもので、初随喜品・読誦品・説法品・兼行六度品・正行六度品の五つであります。

初めの初随喜品というのは、滅後に法華經を聞いて随喜の心を起こすことを言ひます。

二番目の読誦品は、読誦という字の通り、自ら受持読誦する、つまり法華經を読誦することでありまひす。

三番目の説法品は、他に受持読誦を勧めるということでありまして、まず自らが受持し、他人のために法を説くことを言います。

四番目の兼行六度品は、兼ねて六度を行わずということでありまして、法華經受持のかたわらに、兼ねて六波羅蜜の修行をするということでもあります。

五番目の正行六度品は、兼行ではなく、^{まさ}正しく六波羅蜜を行わずということでもあります。つまり、六波羅蜜を主に行わずることが正行六度品ということです。

このように、修行の方法を五種に分けているのであります。

天台大師は、この五品をもって滅後の正行としておりますが、大聖人様はそうではなくして、四信の初めの一念信解と、五品の初めの初随喜品を、末法の正意とされているのであります。

つまり、この『四信五品抄』のなかに、

「分別功德品の四信と五品とは法華を修行するの大要、在世滅後の^{ききょう}龜鏡なり。^{けいけい}荆溪云はく『一念信解とは即ち是本門立行の首めなり』云云。其の中に現在の四信の初めの一念信解と滅後の五品の第一の^{しよずいき}初随喜と、此の二処は一同に百界千如・一念三千の^{ほう}宝篋、十方三世の諸仏の出門なり」（御書 一一一―一頁）

と御指南あそばされております。

このなかの「龜鏡」とは模範ということであり、また「荆溪」とは妙楽大師のことで、これは『文句記』九の文です。つまり、一念信解は法華經本門で立てられた修行の最初であり、基本であるということ、妙楽大師がおっしゃっているのであります。そして「宝篋」というのは宝の箱ということで、これは法体に約して言われているのであります。また「十方三世の諸仏の出門」とは出生された門ということで、これは能証の人に約して言われているのであります。

さらに本抄においては、

「問うて云はく、末代初心の行者に何物をか制止するや」（同 一一一―三頁）

と、末代の初心の行者はいかなる行を専一にして、いかなる行を制止すべきであるかの問いを構えられ、それに対して、

「答へて曰く、檀戒等の五度を制止して一向に南無妙法蓮華經と称せしむるを、一念^{しん}信解^{げしよずいき}初随喜^{けぶん}の気分と為すなり。是則ち此の經の本意なり」（同頁）

と仰せです。

このうちの「檀戒等の五度」というのは五波羅蜜のことで、六波羅蜜から最後の智慧波羅蜜を除いた五度の修行を制止して、「一向に南無妙法蓮華經と称せしむるを、一念信解初随喜の気分と為すなり。是則ち此の經の本意なり」とおっしゃっております。つまり、天台は法華經の本意として滅後の五品を立てましたけれども、大聖人様は四信の初めの一念信解と、五品の初めの初随喜を法華經の本意として御教示あそばされているのであります。

す。

それでは、この一念信解とは何かといいますと、先程も言いました通り、一念に仏を信解して、^{きみょう}帰命することです。これは、信心の最も基本のことと言えます。御本尊様に対する絶対信、まさしく仏様を信解し帰命する、命を仏様に奉るということが、信心においては一番大切であるということでもあります。

これは四信五品のなか、現在の四信の第一であり、法華経の信心修行の位で言えば、最初の位であります。つまり、法華経の妙理を見聞し、一念に信解を起こす、信心修行の最初の位です。そして、この一念信解の功德に五波羅蜜、つまり布施波羅蜜・持戒波羅蜜・忍辱波羅蜜・精進波羅蜜・禪定波羅蜜を修行する功德の百千万億倍、勝れていると説かれているのであります。これは、末法においてはどういうことかといえ、一念信解とは三大秘法の御本尊様を受持信行することがすべてであります。

次に、初随喜品とは何かといいますと、法華経を聞いて随喜の心を起こす、初信の位のことです。これは、滅後の五品のなかの第一に当たります言わば、一念信解と同じ意味でありまして、仏滅後に法華経を聞いて随喜の心を起こす初信の位であります。

天台では、この一念信解と初随喜とを六即位の相似即あるいは観行即乃至、名字即到たるとして一定しておりませんが、大聖人様は名字即到に配当されております。この名字即到というのは、初めて正法の名字を聞いて、つまり言葉によって一念三千の理を理解し、正法を疑わずに信ずる位のことです。まさに、

「名字即到の位にて即身成仏す」(同 一四一七)

と言われますが、まず、この妙法を聞くということがたいへん大事であり、一念信解と初随喜の位を名字即到に当てるのが、末法の修行としては経文の意にかなうということをおっしゃっているのであります。

このように言われている意味は、爾前経においては智慧によって悟りを開くということでしたが、末代の衆生は、智慧はなくとも信をもって慧に代える「以信代慧」、つまり信心によって我々は成仏をするわけです。ですから、この以信代慧を正行として、妙法を信受して唱題に励むことが、すなわち初随喜であるとおっしゃっているのであります。

さて、ただいま「六即」ということが出てきましたけれども、六即とは、天台の立てた、法華円教を修行する菩薩の修行の位のことです。これは『摩訶止観』に説かれているのでありますが、理即到・名字即到・観行即到・相似即到・分真即到^{くきょう}・究竟即到の六即位を言います。

六即の「六」は、差別という意味があり、法華経の行者が己れが仏に等しいとの思いを懐いて、増上慢^{おちい}に陥るのを戒められているのです。その逆に「即」は平等を意味し、行者が究竟即到の仏にも通じることを示して、「私はだめだ」と卑屈の思いを懐いて修行をやめないよう戒められているのであります。つまり、「即」によって信なき者の卑屈に陥るこ

とをまぬかれ、「六」によって智なき者の増上慢を起^じこすことを治す、ということになるのであります。

さて、このうちの「理即」とは、まだ正法を聞かず、仏法に無知な迷いの凡夫の位であります。しかし、理の上においては、みんな平等に仏性を持っているということですから、だれもが平等に仏に成れることを示されるのが、理即という位であります。

次の「名字即」というのは、名字すなわち仏様の言葉を聞いて、自分自身にも仏性が具わることを知り、言うなれば「一切法は皆、是れ仏法である」ということを知る位であります。理即では可能性を示しただけでありますから、まだ即身成仏に至らないのです。ところが、実際に妙法蓮華経の名字を聞く名字即の位において初めて、私達は即身成仏に至ることができるのですから、この名字即という位はたいへん大事な意味を持っているのであります。

三番目に「観行即」とありますが、これは実践修行を通して我が心性の仏を觀じ、所觀の理と能觀の智が相応し、境智冥合して、言行一致の修行に励む位を言います。

四番目の「相似即」というのは、三惑というものがありますね。いわゆる見思惑・塵沙惑^{むみょう}・無明惑の三つで、これらは煩惱の根本をなすものであります。これら三惑のうちの見思惑と塵沙惑を断じ尽くして、六根清浄の徳を得る位であります。これは、仏の悟りに相似する位ということから相似即と言うのであります。この段階では、まだ無明惑を断じてはいないのです。ですから、仏の悟りに似てはいるけれども、頂点に達してはいないということでありませう。

五番目の「分真即」というのは、その無明惑のうちの、元品の無明^{がんぼん}のみを残して、すべての迷いを断じ尽くした位です。

元品の無明というのは、無明惑のなかの最後のところにある、迷いのすべての根本であります。ただし、結論から言いますと、この元品の無明を切る利劍は、我々の御本尊様に対する絶対信なのです。すなわち、南無妙法蓮華経と唱えること、これが元品の無明を切る利劍なのであります。そのように、三惑の様々な迷いを断じ尽くしていながら、元品の無明だけは切れていないというのが、分真即の位です。

そして、この元品の無明を断ち切って初めて、六番目の「究竟即」に登ることができるのであります。

これらは、我々の信心に約しても色々と、段階的に当てはまることのあるのではないでしょう。

初めはみんな、理として仏性を持っているというだけの、いわゆる理即の位です。それが折伏されて、初めて大聖人様の仏法に巡^あり値い、その教えを聞いて御本尊様を信受する。これが、言わば名字即の位ですね。それから、修行にだんだん励んでいって、色々と功徳を積んでいくのが、観行即ということになりませうか。

さらに、三惑とか三障四魔などを信心によって克服していき、究竟即までは行かないけれども、それに近いところ、似たところまで到達してくる。自分もそのようだと、皆さん思っていないですか。これは相似即の位と言えましょう。

それがさらに進んでいきまして、妙法弘通のために精進していこう、広宣流布のために戦っていこうというように化他行にも励んでいく。これは分真即に当たるのではないでしょう。

それからまさに、我が身に無作本有^{む さほん ぬ}の仏界を顕現して、不変不改^{ふ がい かん べき}の完璧な境界を築くこと、これが最後の究竟即ということになるかと思えます。

このように、六即というのは信心の段階を示しているのでありますけれども 一番大事なものは、やはり「名字即の位にて即身成仏す」ということでありまして、妙法蓮華經の名字を聞くことが大事なのです。

だから、折伏に当たっても「下種折伏」と言うでしょう。つまり、それは聞かせることなのです。まず、それが一番大事なのです。そこからすべてがスタートしていくわけでありまして、この名字即の意味がたいへん大事であるということでありまして。

そのほか色々と、もっと深い意味もありますけれども我々の信心に約していくと、そういうことになるのであります。

したがって『三世諸仏総勘文教相廢立』には、

「一切の法は皆是^{みなこれ}仏法なりと通達し解^{げりょう}了する、是を名字即と為^なづく。名字即の位にて即身成仏する故に円頓の教^{えん どん きょう}には次位の次第無し」(同)

と仰せられているのでありまして、「円頓の教」というのは、円満にして偏らず、時を経ずに速やかに成仏できる教えを言うのであります。「円頓」は本来、天台の法門を述べたものであります。今時末法^{こん じ}では、円頓の教えとは三大秘法の南無妙法蓮華經のことです。

また「次位の次第」というのは、仏道修行における位の順序のことです。五十二位で言えば、十信・十住・十行・十回向^{えん こう}・十地・等覺と次第に登って行って、最後に妙覺に至るということを、爾前經では説いております。しかし、法華經はそうではなく、「次位の次第無し」とあるように、そういった段階、順序次第を経ず、妙法を唱えることによって、我々はその身そのままに成仏をしていくということです。爾前經と法華經との大きな違いが、そこにあるのであります。

ですから、妙法蓮華經は、何回も生まれ変わって、だんだん、だんだんと位を登って行って仏に成る教えではないのです。南無妙法蓮華經を聞いて信心に励んだ、まさに名字即の位から直ちに、我々はその身そのままに即身成仏できるということでありまして、この意味が非常に大事でありまして、末法の本未有善の者は、まさにこの妙法を受持信行することによって直ちに仏界に至ることができるということを我々は確信し、信心に励んでいく

ことが大事だと思えます。

では、ただいま拝読いたしました、テキストの本文に入ります。

初めに「問ふ、汝が弟子一分の解無くして但一口に南無妙法蓮華經と稱する其の位如何」とありますが、これは、大聖人様の弟子達は少しも知的な領解もなく、ただ南無妙法蓮華經と唱えるだけだとするならば、その人の修行の位の程度はどの辺にあるのか、という質問であります。

この質問に対しての答えとして「答ふ、此の人は但四味三教の極位並びに爾前の円人に超過するのみに非ず、将又真言等の諸宗の元祖、畏・嚴・恩・蔵・宣・摩・導等に勝り出すこと百千万億倍なり」と示されております。すなわち、この人は、法華經以前の爾前権經の最高の位にある者や、また法華經以前の、爾前經中の円教の人より勝れているばかりではなくして、真言宗の善無畏、華嚴宗の智儼（嚴）、法相宗の慈恩、三論宗の吉蔵、律宗の道宣、禪宗の達磨（摩）、浄土宗の善導といった七宗の祖師達よりも、百千万億倍も勝れていると仰せられているのであります。

つまり、まさしく私達、大聖人様の弟子檀那は、たとえ本未有善の荒凡夫にして、名もなき一介の者であっても、ひとたび妙法蓮華經と唱え、至心に自行化他の信心に励む時、大御本尊様の廣大無辺なる功德は爾前經の祖師達よりも百千万億倍も勝れて、成仏することは疑いないということであります。

ただし、いつも申し上げますが、これは、我々の信心の厚薄によることを、よくよく銘記しておかなければなりません。

『日女御前御返事』には、

「此の御本尊も只信心の二字にをさまれり。以信得入とは是なり。日蓮が弟子檀那等『正直捨方便』『不受余經一偈』と無二に信ずる故に因、此の御本尊の宝塔の中へ入るべきなり。たのもしたのもし。如何にも後生をたしなみ給ふべし、たしなみ給ふべし。穴賢。南無妙法蓮華經とばかり唱へて仏になるべき事尤も大切なり。信心の厚薄によるべきなり。仏法の根本は信を以て源とす。されば止觀の四に云はく『仏法は海の如し、唯信のみ能く入る』と。弘決の四に云はく『仏法は海の如し、唯信のみ能く入るとは、孔丘の言尚信を首と為す、況んや仏法の深埋をや。信無くして寧ろ入らんや。故に華嚴に信を道の元、功德の母と為す』等」（同 一三八八頁）

と仰せであります。

ただいまの御書を拝してお解りの通り、まず仏道修行は「以信得入」と仰せのように、なにしろ信をもって根本とするということであります。この「以信得入」というのは、皆さん方も知っていると思えますけれども、「信を以て入ることを得」と読み、信をもって初めて法華經の妙理を会得し、成仏することができるという意味であります。法華經の譬

喩品第三では、例えば智慧第一と言われた舍利弗ですら信心によって得道したことを挙げて、ただ信のみが仏道修行の要諦ようていであると説かれているのであります。すなわち、信なくして成仏することは、絶対にないのであります。

このことは、さらに『御義口伝』のなかにも、

「一念三千も信の一字より起こり、三世諸仏の成道も信の一字より起こるなり。此の信の字は元品がんぼんの無明を切る所の利剣なり。其の故は、信は無疑むぎわっしん曰信とて疑惑だんぼを断破する利剣なり」(同 一七三七頁)

とありますが、先程も言いましたように、一切衆生の迷いの根本がこの元品の無明です。この元品の無明を対治しなければ、本当の成仏に至らないのです。この「無疑曰信」とは「疑い無きを信いと曰う」と読みまして、元品の無明を切るところの利剣は、まさに信の一字であるとおっしゃっているわけです。

続いて

「解げとは智慧の異名なり。信はあたい 価の如く解は宝の如し。三世の諸仏の智慧をかうは信の一字なり。智慧とは南無妙法蓮華経なり。信は智慧の因にして名字即なり。信の外ほかに解無く、解の外ほかに信無し。信の一字を以て妙覚の種子と定めたり。今日蓮等の類たぐい南無妙法蓮華経と信受領納する故むじょうほうじゅふぐじとくに無上宝聚不求自得の大宝珠を得るなり。信は智慧の種なり、不信は墮獄の因なり」(同頁)

とあり、この「妙覚」とは仏様のことで、「信の一字」が仏と成るための種子であると仰せであります。ですから、信がそれほどすばらしければ、逆に「不信」すなわち、信じないということは地獄おに墮ちる原因となると、厳しくおっしゃっているのであります。

このように、智慧の因が信であり、我々は信をもって初めて成仏することができるのであります。先程も言いました通り、爾前経では色々な修行の内容が説かれ、智慧をもって成仏に至る、智慧がなければ成仏できないとされてきたのですが、法華経はそうではなく、まさに信を強調しておられるのであります。

したがって『法華題目抄』にも、

「夫それ仏道に入る根本は信をもて本とす」(同 三五三頁)

と説かれ、『法蓮抄』にも、

「信なくして此の経を行ぜんは手なくして宝山に入り、足なくして千里の道くわだを企つるがごとし」(同 八一四頁)

と仰せになっております。

さらに、同様の御文を挙げますと、『法華題目抄』には、

「而しかるに今の代の世間の学者の云はく、只信心ほか計りにて解心なく、南無妙法蓮華経と唱ふる計りにて、争いかでか悪趣免をまぬかるべき等云云。此の人々は経文の如くならば、阿鼻大城免まぬかれがたし。さればさせる解げはなくとも、南無妙法蓮華経と唱ふるならば、悪

道をまぬかるべし」(同 三五四㊦)

と示されています。つまり「悪趣」というのは、地獄・餓鬼・畜生の三つを三悪趣あるいは三悪道と言い、修羅を加えて四悪趣と言いますが、一生懸命に南無妙法蓮華経を唱えることによって、我々はその四悪趣に墮ちることをまぬかれることができると強調されているのであります。

同じような御書は『妙法尼御前御返事』にもあり、

「白粉の力は漆うるしを変じて雪のごとく白くなす。須弥山しゅみせんに近づく衆色は皆金色こんじきなり。法華経の名号を持つ人は、一生乃至過去遠々劫の黒業の漆変じて白業の大善となる。いわうや無始の善根皆変じて金色となり候なり」(同 一四八三㊦)

と仰せになっているのであります。

あるいは『御義口伝』に、

「此の本法を受持するは信の一字なり。元品の無明を対治する利剣は信の一字なり。無む疑ぎ日信わっしんの积これ之を思ふべし云云」(同 一七六四㊦)

とあります。

さらに『観心本尊抄』を拝しますと、

「此の時地涌千界出現して、本門の积尊きょうじを脇士なと為す。一閻浮提第一の本尊、此の国に立つべし」(同 六六一㊦)

という有名な御文がありますが、私達たもが持つ大御本尊様こそ「一閻浮提第一の本尊」であるとの仰せであります。

されば、まさしく『持妙法華問答抄』には、

「持たるゝ法だに第一ならば、持つ人随って第一なるべし」(同 二九八㊦)

と仰せられているのであります。したがって、我々が持ち奉る南無妙法蓮華経が第一で、拠り所とする本尊が「一閻浮提第一の本尊」であれば、それらを持つ我々も、その御本尊様を信ずることによって第一になると、大聖人様がおっしゃっているのであります。

ですから、一生懸命に信心に励むということが、我々の即身成仏に至る上の一番根本であるということが、この御文の内容であります。

次に、二番の『富木殿御書』を拝読いたします。

2 富木殿御書

我が門家もんけは夜は眠りを断ち昼は暇いとまを止めて之を案とどぜよ。一生空しく過これごして万歳むな悔ぼんざいゆること勿なかれ。(御書一一六九㊦一行目)

この御文は、皆さんも既に御住職や幹部の方々から聞かれたり、御自分でも話す時にお

引きになっていらっしゃるのではないのでしょうか。

この御書は、建治三（一二七七）年八月二十三日、富木常忍に与えられた御書であります。

富木常忍という方は、下総^{しもうさ}地方の信徒の中心者と言われた人でありまして、この方は現在の千葉県市川市中山の人で、千葉氏に仕えていた武士だと思われませんが、かなりの学識があったようでありまして、大聖人様からは『観心本尊抄』など、重要な法門をお示しになった御書を多数、頂いております。

元々は鳥取県、昔は因幡^{いなほのくに}国と言いましたが、その富城^{と き}郡に本領があったようであります。建長六（一二五四）年ごろ、大聖人様に帰依して、のちに出家して名を常忍と改めたのであります。

文永五（一二六八）年に蒙古の使者が来て、『立正安国論』の他国侵逼^{しんびつ}難の予言が的中した際に、同じく千葉におられた大田乗明、それから鎌倉におられた四条金吾と共に、幕府の問注所に召喚されました。この時、その心得を記された『問注得意抄』を大聖人様から頂いております。

また、弘安二（一二七九）年の熱原法難の折には、富士から逃れてきた日秀や日弁達を保護し、さらに大聖人様の御入滅のあとは、名を常修院日常と改めて、自邸を法華寺としました。それが現在の中山法華経寺であり、この寺を開いた人であります。

さて、本抄は初めに法華経の方便品第二や化城喻品第七、涅槃経等の文を引いて、誹謗正法の罪、すなわち謗法の罪の恐ろしさについて述べられております。

そして、悪知識に紛動されてはならないことを強調されたあと、上古の賢人、例えば天親菩薩や馬鳴菩薩^{めみょう}などが経論を守護したことや、日本国の真言の諸師、いわゆる弘法、慈覚、智証などの者達が「大日経第一」という邪義を立てて法華経を誹謗し、各宗の人達も皆、この邪義を疑わず、その誤りに気がつかなかったことを記されております。

そして最後に、ただいま拝読したところの「我が門家は夜は眠りを断ち昼は暇を止めて之を案ぜよ。一生空しく過ごして万歳悔ゆること勿れ」との御文をもって結ばれているのであります。

この御書は、まさに仏道修行の厳しさというものを説かれているのであります。広布達成へ向けて寸暇を惜しんで随力弘通し、「止暇断眠」の努力を惜しまざることをお示しあそばされているのであります。

皆さん方はそのようなことはないと思いますが、時々「どうも、折伏が思うようにいかない」というような話を聞くことがあります。もちろん、濁悪^{じよくあく}の末法の本未有善の衆生が相手でありますから、たしかに折伏は困難ではありますが、厳しい言い方をすれば、それは、私は「動いていない」ということだと思えます。

日頭上人猥下は「動けば必ず智慧が湧く^わ」とおっしゃっております。動かないから、智

慧が湧かないのです。折伏する手立てが判らない時でも、動けば必ず智慧が湧いてきて、手立てが判ってくるのです。だから、まず動くことです。折伏ができないということは、動いていないということに尽きるのです。がむしゃらに動くんですよ。そうすれば、必ず何かを一つ掴みます。

もちろん、色々な壁にぶち当たることもありますよ。世間の壁、友人との問題、近所の人との問題など、色々とありましょう。それでも、なにしろ徹底的に動く。「動けば必ず智慧が湧く」。日頭上人猊下のお言葉に、そうあるのです。あらゆる壁も、動くところから開かれてくるのだと、私は思います。

ですから、そのためには、まずしっかりと唱題をすること。そして、飽くなく動くということ。途中であきらめなければ、必ず折伏は成就するのであります。本日、ここにいらっしゃる方々のなかにも、そういう体験を実際に持っていらっしゃる方がいるでしょう。本当に折伏に折伏を継いで、それでようやく折伏は成就するのです。

「あなた、信心をしますか」とひとこと言って、それで「はい」と言にう人がいますか。いませんよね。ひとこと言って、それで自分は折伏をしたと思っているようでは、少し増上慢が過ぎるのではないのでしょうか。飽くなく戦って、動いていく。それが折伏でしょう。ひとこと、ふたことで入信してくれるのなら、もう、とっくに広宣流布ができていますよ。そこに我々が動くということ、努力することの大切さがあるのです。信心とは実践であり、行動ですから、頭ではないのです。動くことの大切さを、よく覚えていただきたいと思えます。

この典型的な例が、不^ふ軽^{きやう}菩薩です。法華経のなかで説かれる不^ふ軽^{きやう}菩薩の振る舞いを、我々はよく見習うべきだと思えます。

不^ふ軽^{きやう}菩薩は威^い音^{おん}王^{わう}仏^{ぶつ}の滅^{めつ}後^ご、像^{ざう}法^{ぽう}時代^{じだい}に出現^{しゆげん}して、一切^{いっけつ}衆^{しゆ}生^{せい}に仏^{ぶつ}性^{じやう}があるとして礼^{らい}拝^{はい}讚^{さん}歎^{たん}して、

「我^{われ}深^{なん}く汝^{なん}等^{だち}を敬^あう。敢^あえて軽^{きやう}慢^{まん}せず。所以^{ゆえ}は何^{いか}ん。汝^み等^な皆^{どう}菩薩^{ぼさつ}の道^{みち}を行^まじて、当^{まさ}に作^さ仏^{ぶつ}することを得^えべし」(法華経 五〇〇^ご〇^じ)

と唱えて、会^あう人^{ひと}ごとに専^{もつ}ら礼^{らい}拝^{はい}を行^まじたのであります。また、遠^{とほ}くに在^ある人^{ひと}に対^{たい}しましても、

「我^{われ}敢^あえて汝^{なん}等^{だち}を軽^{きやう}しめず。汝^み等^な皆^{どう}、当^{まさ}に作^さ仏^{ぶつ}すべきが故^{ゆゑ}に」(同^{どう})

と言って礼^{らい}拝^{はい}したのであります。

しかし増上慢の四^し衆^{しゆ}、いわゆる比^ひ丘^{きう}・比^ひ丘^{きう}尼^に・優^う婆^ぼ塞^{そく}・優^う婆^ぼ夷^いを言^いいますが、比^ひ丘^{きう}はお坊^{ぼう}さん、比^ひ丘^{きう}尼^には尼^にさん、優^う婆^ぼ塞^{そく}は男^{おとこ}性^{じやう}の信^{しん}者^{しや}、優^う婆^ぼ夷^いは女^{おんな}性^{じやう}の信^{しん}者^{しや}が、不^ふ軽^{きやう}菩薩^{ぼさつ}に対^{たい}して瞋^{しん}恚^いの心^{しん}を生^なじて、

「是^この無^む智^ちの比^ひ丘^{きう}、何^{いか}れの所^{ところ}より来^{きた}って、自^{みづか}ら我^{われ}汝^{なん}を軽^{きやう}しめずと云^いって、我^{われ}等^らが与^ため^{ため}に当^{まさ}に作^さ仏^{ぶつ}することを得^えべしと授^{かく}記^きする。我^{われ}等^ら、是^この如^{ごと}き虚^こ妄^{もう}の授^{かく}記^きを用^{もち}いず」(同^{どう})

と言いました。つまり、不輕菩薩を軽んじて、不輕菩薩に対して「この無智の悪比丘は、どこからやってきたのか。あなたを軽んじないと言い、我らが必ず仏に成るだろうと予言しているが、我らはそのような偽りの予言は用いない」と悪口罵詈したのであります。

それはそうですね。現代でもそうでしょう。折伏をしていくと、色々なことを言われますよね。しかし、これはもう当然なのです。先程も言いました通り、そんなに簡単に折伏はできませんし、やはり不輕菩薩と同じように色々な悪口を言われることもあるのです。まさに、不輕菩薩がそうだったわけです。けれども、不輕菩薩は、どんなに悪口罵詈されながらも瞋恚の心を起こしませんでした。

我々は凡夫ですから、折伏している時に変なことを言われると、けんかになってしまって、「そこまで言うか」などということになってしまいがちですが、それではいけません。絶対に瞋恚の心を起こさない。慈悲の心をもって対応していかなければなりません。

お題目を唱えていると、この慈悲の心が出てくるのです。しかし、お題目を唱えていないと、どうしても十界の下のほうの瞋りの心が出てきてしまい、せっかくなところまで行っても、だめになってしまうことがあるかも知れません。やはり、常にお題目を唱えて、仏界という、すばらしい命の用きを持っていないとだめなのです。それが、お題目を唱えていると、いざという時に、うまい具合に出てくるのです。ですから、唱題と折伏というのは、全く一体不二の関係なのです。

それはそれとして、不輕菩薩は絶対に瞋りの心を生ぜず、多年にわたって常に、

「汝当に作仏すべし」(同 五〇一)

と言って、けっして礼拝行をやめなかったのであります。

そのために、増上慢の四衆は不輕菩薩に対して、初めは悪口だけだったのですが、杖木瓦石をもって打擲した、つまり、杖や木でたたいたり、瓦や石を投げて、迫害を加えたのであります。しかし、不輕菩薩はそれを避けて遠くに行き、なおかつ声高に、

「我敢えて汝等を軽しめず。汝等皆当に作仏すべし」(同)

と言って、なおも礼拝行を続けたのであります。

ひたすら礼拝行を続けた不輕菩薩は、その功德によって命を終わらんとする時に至って、威音王仏の説かれた法華経を虚空のうちに聞いて、ことごとく受持して六根清浄を得、六根清浄を得終わってさらに寿命を延ばすこと二百万億那由他歳、その間、広く人々のために法華経を説いたのであります。

その結果、かつて不輕菩薩を軽蔑して悪口罵詈し、杖木瓦石をもって迫害した増上慢の四衆、すなわち、不輕菩薩を軽しめて「不輕」と名付けた者達も、不輕菩薩が但行礼拝の功德によって大神通力、樂説弁力、大善寂力を得たるを見るに及び、その説くところを聞いて皆、信伏随従するに至ったのであります。

大神通力というのは、身に神通力を示現することです。樂説弁力というのは、自

在無礙^{むげ}に弁舌する力を持つことであります。それから大善寂力というのは、心を静めて真理を観察し、心身ともに動揺することがなく、安定した状態を禪定と言いますが、その心を得ることができたのであります。

ですから、折伏に当たっても、大神通力、樂説弁力、そして泰然自若とした大善寂力をもって折伏すると違うのです。また、そういう功德を普段から身につけることが大事なのです。もちろん、不輕菩薩の得た功德がそのまま末法の私達に当てはまるかどうかは判りませんが、やはり信心の人格を磨き、これをもって折伏に当たるのが極めて大事なのであります。

『法華文句』を拝しますと、

「不輕菩薩が、一切衆生に仏性ありとして人々を輕んぜず、深く敬ったのは、衣座室の三軌のうちには如来の座に当たり、身口意^{しんくい}の三業に当てはめれば口業に当たる。悪口罵詈・杖木瓦石の難を忍んだのは如来の衣に当たり、また意業に当たる。慈悲の心をもってことさらに礼拝行を続けたのは如来の室に当たり、また身業に当たる」（学林版文句会本下 四五四^〆取意）

と仰せであります。

すなわち、不輕菩薩は礼拝行を通して衣座室の三軌を身口意の三業にわたって行じた功德によって、今述べた大神通力等の三力を得たのであり、また、これを目の^ま当たりにした増上慢の四衆も法華經に帰依することができたわけであります。

これは、どういうことかと言いますと、不輕菩薩をさんざんに迫害した増上慢の者達も、さすがに不輕菩薩の大神通力、樂説弁力、大善寂力を見て、ついに信伏随従するに至らざるをえなかったということです。

このことは、先程も言いました通り、我々の折伏においてもまことに大事なことであります。

折伏には、説得力がなければだめでしょう。その説得力が乏しいと、相手はなかなか納得しませんし、入信しません。したがって、説得力を身につけなければなりません。いくら言葉が巧みであっても、それだけでは相手は入信しません。それは、皆さん方も色々な体験をなさっていらっしゃるから、よくお判りのことと思います。それだけでは、絶対に入信しません。

大聖人様は、そのことを『法蓮抄』に、

「凡夫は此の經は信じがたし。又修行しても何の詮^{また}かあるべき。是^{せん}を以て之^{これ}を思ふに、現在に眼前の証拠あらんずる人、此の經を説かん時は信ずる人もありやせん」（御書八一四^〆）

と仰せであります。つまり、折伏に当たって最も説得力があるのは、信心の功德を私達自身が現証として示すことなのです。これを見たら、だれでも信じますよ。ですから、この

ことがたいへん大事であるということです。

今、我々の折伏も、不軽菩薩の大神通力、樂説弁力、大善寂力を目の当たりにして、さすがの増上慢の四衆も等しく、その説くところを聞いて信伏随従するに至ったように、確たる功德の現証を示すことが大事であります。そのためには、まず自らが自行化他の信心に励むことが大事であります。自行化他の信心に励むところ、妙法の広大なる功德によって、我らも必ず、不軽菩薩と同様に、自然と三力を得ることができるのであります。

故に、大聖大様は『御義口伝』に、

「所詮今日蓮等の類南無妙法蓮華経と唱へ奉る行者は末法の不軽菩薩なり」（同一七七八頁）

と仰せられているのであります。すなわち、私達が不軽菩薩と同様に三力を得ることができれば、おのずと私達の身口意の三業にわたる所行のすべてが折伏に役立つ、強烈な説得力を持つことになるのであります。

ですから、例えば、折伏の言葉一つを取っても、自然と樂説弁力などの功德が発揮されて、相手の信頼を得ることができるのであります。

折伏は、我々の言っていることを、相手が信じてくれなければ何もなりません。相手の信頼に足る言葉、行い、意がなければ、折伏はなかなか成就しないのであります。

大御本尊への絶対信をもって自行化他の信心に励む時に、つまり唱題し、折伏に動くこと、これを繰り返し、繰り返し行うことによって、妙法の広大なる功德により自分自身が変わる。自分自身が変わるから、相手も変わる。だから、そこに初めて、折伏の達成成就があるのであります。

言葉一つで簡単に折伏できるケースが、たしかにあるかも知れません。相手の機根が合った時などに、そういうことがないわけではありません。しかし、末法の折伏は、どだい、そんな簡単なものではないのです。だから私達が、お題目を唱えて、信心の現証を身でもって示し、その現証をもって言葉に代えて折伏していくことが大事だということでありす。

それから「飽くなく動く」と言いましたけれども、もし折伏を途中であきらめてしまったならば、折伏は絶対に成就しません。ですから、もし折伏が頓挫するようなことがあったら、本日申し上げたように、まず一人ひとりが不軽菩薩の行解を見習って、この「止暇断眠」の御教示を思い浮かべてください。必死に動けば、仏祖三宝尊の御冥加が必ずあり、折伏達成に至るのであります。ですから、続けていくこと、なにしろ動くということが大事であると思います。

唱題に唱題を重ね、御本尊様に祈って動けば、「祈りとしてかなわざるはなし」であります。是非、この確信を持って、折伏誓願達成へ向けて御精進いただきたいと思ひます。

次に、三番目に『太田殿女房御返事』について申し上げます。

3 太田殿女房御返事

今法華經に衣をまいらせ給ふ女人あり。後生には八寒地獄の苦をまぬかれさせ給ふのみならず、今生には大難をはらひ、其の功德のあまりを男女のきんだち、きぬにきぬをかさね、いろにいろをかさね給ふべし。(御書一一八二行目)

この御書は、大聖人様が、建治三（一二七七）年十一月に身延で著されまして、下総国（現在の千葉県）に住んでいた、大田乗明の夫人に与えられた御書であります。

大田乗明は、文応元（一二六〇）年ごろに、富木常忍の折伏によって大聖人様の門下となったと思われませんが、夫人も夫と共に早くから大聖人様の門下となったようであります。

この御書は、大田乗明の夫人から、綿入れの小袖一枚等の御供養がなされたことに対する御返事で、地獄、特に寒地獄の状態について詳しく述べられ、その寒地獄に墮ちる業因を明かされた上から、衣服を御供養された功德を讃えられております。これは、大田乗明の御夫人が身延の冬の寒さを思って、大聖人様に小袖等を御供養したことに対する感謝のお手紙であります。

この御書は、まず初めに、大地の下には二つの地獄があり、一つが熱地獄で、もう一つが寒地獄であることを明かされております。

そして、このうちの熱地獄は、炭に火を起こし、野に火をつけたような猛火で、鉄は溶けた湯のようになっており、その地獄で罪人が焼かれる様は、大火のなかに紙や木くずを投げ入れたようなものである、と述べられております。

この熱地獄へは、例えば他人の家に火をつけて盗みを働く者や、敵を火攻めにして苦しめた者、嫉妬に胸を焦がす女人が墮ちると、その業因を明かされ、他人を火によって苦しめた者が、自身もその火によって苦しむという、因果の理法を示されているのであります。また、女人が嫉妬に胸を焦がすと、自分が苦しむだけではなく、嫉妬する相手に対して陰険に攻撃するなど、必ず他人をも苦しめることから、熱地獄に墮ちるとされたものと思われれます。

このように、熱地獄と寒地獄がありますけれども、これは俗に八熱地獄、八寒地獄と言われます。このうち、八熱地獄については、当抄には詳しく述べられておりませんが、長阿含経には、等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間という、八つの地獄のあることが説かれております。

初めの「等活地獄」というのは、殺生を犯した者が墮ちると言われている地獄でありますけれども、そこに墮ちますと、五体が裂かれて粉碎されるのですが、清涼の風、つまり涼しい風が吹いてくると、元の身体に戻ってしまうのです。そして再び、五体が裂か

れて、また風が吹いてきて元の身体に戻る。それを何回も何回も繰り返すのです。そのように、身体をずたずたにされて殺されても、前と等しく活き返り、何度も苦しみが繰り返されるのが等活地獄であります。このように聞きますと、その苦しみの状況がよく判ります。

次の「黒縄地獄」は、殺生や偷盗ちゅうとうを犯した者が墮ちるとされ、灼熱しゃくねつした鉄の縄で墨を打ち、その跡を熱鉄おのの斧で切り裂かれるような地獄と言われます。

三番目の「衆合地獄」は、殺生や偷盗、邪淫を犯した者が墮ちる地獄であると言われております。相対する鉄の山が両方から崩れ落ちて、罪人を圧殺するというような、まことにもって苦しい状態の地獄で、これを石割地獄いしわりとも言います。

四番目が「叫喚地獄」で、ここには殺生、偷盗、邪淫のほか、飲酒おんじゆを犯した者が墮ちるとされます。熱湯や猛火の鉄室に入れられて、その呵責かしゃくに耐えきれずに号泣する、叫喚する、泣き叫び、わめき散らすような地獄と言われます。

五番目の「大叫喚地獄」は、前の叫喚地獄の十倍の苦しみを味わうと言われております。これは五戒、つまり殺生、偷盗、邪淫、飲酒に加えて、不妄語の戒めを破った者の墮ちる地獄とされます。

六番目は「焦熱地獄」で、ここには殺生、偷盗、邪淫、飲酒、妄語のほか、邪見の罪を作った者が墮ちて、火熱かねつによる苦しみを受ける所で、炎熱地獄とか火焚地獄かえんとも言われます。この「火焚」とは、火を焚くという意味であります。

この焦熱地獄の次が「大焦熱地獄」で、前の焦熱地獄より、さらに激しい炎熱の苦を受ける所とされます。

そして、最後の八番目が「無間地獄」むけんです。これは五逆罪、つまり父を殺し、母を殺し、阿羅漢を殺し、仏身より血を出だし、和合僧を破るという正法誹謗の大悪を犯した者が、ここに墮ちるとされます。

劍樹の苦しみとって、劍つるぎを葉っぱに見立て、その劍樹の林のなかで、罪人が全身、傷だらけになる苦しみを受ける地獄を言うのです。また、刀を逆さに立てて山のようにし、その上を渡らせるということから刀山地獄とも言われます。あるいは鑊湯地獄かくとうとも言われます。この湯の「鑊」とは、罪人を煮る釜のことです。昔、石川五右衛門は釜で煮られたということになっていますが、鑊湯とはそのように釜ゆでにすることを言うのです。

こういった苦しみを次から次へと間断なく受けるので、無間地獄との名があり、さらに阿鼻地獄とか、阿鼻叫喚地獄とか、阿鼻大城とも言われます。

このような八つの地獄を、八熱地獄と言うのです。

それから、もう一つの寒いほうの地獄が八寒地獄です。これは、涅槃經のなかに説かれておりますけれども、一番目が阿波々地獄あはは、二番目が阿吒々地獄あたた、三番目が阿羅々地獄あらら、それから四番目が阿婆々地獄あばばというのです。おもしろい名前でしょう。これはどういうこ

とかといいますと、今挙げた初めの四つの地獄の名前の由来は、あまりの寒さに、思わず「アハハ」あるいは「アタタ」「アララ」「アババ」というように悲鳴を上げるから、このような名前がついていると言われるのです。

また、五番目からは優鉢羅地獄、波頭摩地獄、拘物頭地獄、分陀利地獄という名前です。この優鉢羅地獄というのは、寒さによって身が裂けて、青い蓮の花のようになるということです。次の波頭摩地獄というのは、同じようにして紅蓮の花のようになってしまう。拘物頭地獄というのは、赤蓮華の花のようになる。そして分陀利地獄は、身が裂けて白蓮華の花のようになることとされ、それぞれ色や形がそのようになることから、このような名前がつけられていると言われております。

花を冷凍して、それをポンとたたくと、すぐにバラバラになる様子を、テレビで見たことがあります。すごく寒くなると、ちょっとした衝撃で花がバラバラになってしまうのですが、そのように、身体もみんなバラバラになってしまうということです。そのような状態の地獄だと想像すれば、よいのではないかと思います。なにしろ、そのように苦しく、厳しい地獄に堕ちてしまうということです。

このお手紙のなかでは、寒地獄の寒さの譬えとして、信濃国（現在の長野県）の諏訪湖の湖面が厚く凍る寒さや、越中国（現の富山県）の立山に吹く北風の冷たさ、加賀国（現在の石川県）の白山の雪中の苦しみや、雉子が雪に責められることなどを挙げられております。

当時は、非常に寒い時期だったのですね。一説には小氷河期であったとも言われておりますけれども、今は逆に温暖化の時期ですね。温暖化で本当に色々な問題が起きておりますけれども、大聖人様の御在世当時は、現在よりもはるかに寒気が厳しくて、積雪も多かったようであります。

私達の子供のころも、そうでしたね。私は、小さい時に総本山にいたことがあるのですが、お山の近く田貫沼、今は田貫湖と言っていますが、そういう湖があるのです。冬になると、その湖面が凍って、スケートができました。ところが、今は凍らないようですね。あるいは本栖湖とか河口湖なども、昔は凍っていたようですが、今は温暖化で凍らなくなったようです。

大聖人様は、今と比べるとはるかに寒かったこともあり、寒地獄の譬えとして、このようにお引きになったのではないかと思います。

この寒地獄へは、この世で他人の衣服を盗んだ者や、父母や師匠などが寒がっているのをよそに自分のみが暖かく過ごす者達が堕ちると、その業因を明かされております。他人の衣服を奪って寒さで苦しめた者や、父母や師匠の寒さを思いやらずに自分のみが暖からを貪った者は、その因果応報により、厳しい寒さに責められるのであるということです。

ただし、御本尊様を持ち、至心に信心に励む者は、御本尊様の功德によって、

「八寒地獄の水にもぬれず八熱地獄の大火にも焼けず」（御書 一〇五四[㊟]）

と御教示であります。この御金言をよく拝しますと、私達が過去世に様々な罪障を積んだとしても、今日、大聖人様の仏法に巡り値^あって、一心に自行化他の信心に励めば、すべての罪障は消滅することができるということでもあります。

我々は何世も何世も、繰り返し繰り返し、死に生まれ、死に生まれて、転々として今日あるわけでありますから、一人ひとりの宿業というのは様々なのです。そのなかでは、悪業もたくさん積んできているでしょう。けれども、末法に生まれて大聖人様の仏法を信仰することによって、まさにこの御妙判にあるように、一時にそれが解消されるのです。これが大聖人様の妙法蓮華經の仏法のすばらしさなのです。

だから、何があっても、お題目を第一に考えていけば、過去遠々劫の罪障も必ず消滅することができるのであります。これが仏法の力であり、御本尊様の力なのです。そのためにも我々は、もっと真剣にお題目を唱えていく必要があるのであります。

同抄には次いで、衣服を御供養して功德を受けた過去の事例を示されまして、御夫人が綿入れの小袖を御供養した功德を讃えられております。すなわち、テキストに載せた御文の少し前に、

「地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道のなかで、天道というのは、生まれる時から衣服が備わっている境界である。人界のなかでも、商那和修^{しょうなわしゆ}や鮮白比丘尼^{せんびやく}らは、母の胎内にいる時から衣服が備わって生まれられたのである。これは、貴い人々に衣服を与えただけではなく、父母や主君、仏法僧の三宝に、清らかで厚い衣服を御供養した人達である。商那和修という人は、裸であった辟支仏^{びやくしぶつ}に僧衣を差し上げて、世々生々に衣服がその身に付いて回るのである。憍曇弥^{きょうどんみ}という女性は、仏に欽婆羅衣^{きんばらえ}を御供養申し上げて一切衆生喜見如来となられた」（同 一一八[㊟]取意）

と仰せられているのです。このなかの「欽婆羅衣」というのは、色々な説がありますがけれども、毛織りの高価な衣であったと思われまます。それを御供養申し上げて、一切衆生喜見如来となったと仰せであります。

そして最後に、大田乗明の夫人に対して小袖の御供養を讃えられて、あなたは、後生に寒地獄の苦悩をまぬかれるだけではなく、今生には大難を払い、その功德の余りを男女の子供達に及ぼし、衣に衣を重ね、色に色を重ねるように福が重なるであろう、と仰せになっております。

このように、末法の法華經の行者に供養する功德は、釈尊に衣を供養する功德にも勝るのでありまして、我が身だけではなく、子供達にまで及ぶことを示されているのであります。

『国府尼御前御書』には、

「釈尊ほどの仏を三業相應して一中劫が間ねんごろに供養し奉るよりも、末代悪世の世

に法華經の行者を供養せん功德はすぐれたりととかれて候」(同 七三九頁)

と仰せであります。もちろん、ここで大聖人様が「法華經の行者」と仰せられているのは、総じて言えば法華經を受持信行する者達のことではありますが、別してはまさしく大聖人様のことです。つまり、御本尊様に御供養する功德というのは、これほど勝^{すぐ}れているということをおっしゃっているのです。

今日、皆様方の尊い御供養によりまして、宗門は、御影堂の大改修落慶大法要を間近に控え、様々な所を改修工事したり、整備しております。こういったことも、皆様方が記念局への御供養をしていただいた賜物^{たまもの}であります。ですから、お山へ来るたびに、少しずつ様子が変わってきているでしょう。総本山といたしましても、やはり登山してこられる方々が本当に気持ちよく御戒壇様にお詣りできるように、色々と工夫し、頑張っておりますが、それもこれも、本当に皆様方の尊い御供養のおかげであります。改めて、この席を借りまして、皆様方に対して厚く御礼申し上げる次第でございます。本当に有り難うございます。

それで、いよいよ本年の十一月には、御影堂の大改修落慶大法要が行われます。また、そのあとに続いて、十二月にかけて記念法要が奉修されます。

そのため、本年は十一月に落慶大法要を迎える前、つまり十月までには、すべての支部が折伏誓願目標を遠成していただきたいのです。そして、御影堂大改修落慶大法要の時に全支部達成の御報告を、御本尊様に申し上げたいのです。大聖人様に「我々は、かく戦いました」「このようにして誓願を達成いたしました」という我々の行業を、みんなで御報告したいと思います。それが、改築・新装成った御影堂の威容にふさわしい、内容のある信心ではないでしょうか。

たしかに、十二ヵ月で行ってきたところを、今年は十月いっぱいであろうというわけですから厳しい戦いではありますけれども、できないことはないと思います。みんなが心を合わせていけば、十月中に全支部が誓願目標を達成し、十一月の大法要には、みんなで御登山いただいて、晴れて御報告申し上げたいと、このように思う次第であります。

今も申し上げました通り、今年は本当におめでたい年であります。皆様方には、いよいよ信心に住せられまして、みんなで御影堂の落慶法要の年にふさわしい信心を頑張っていたいただきたいと、御健闘をお祈りする次第であります。